緑（みど）り川

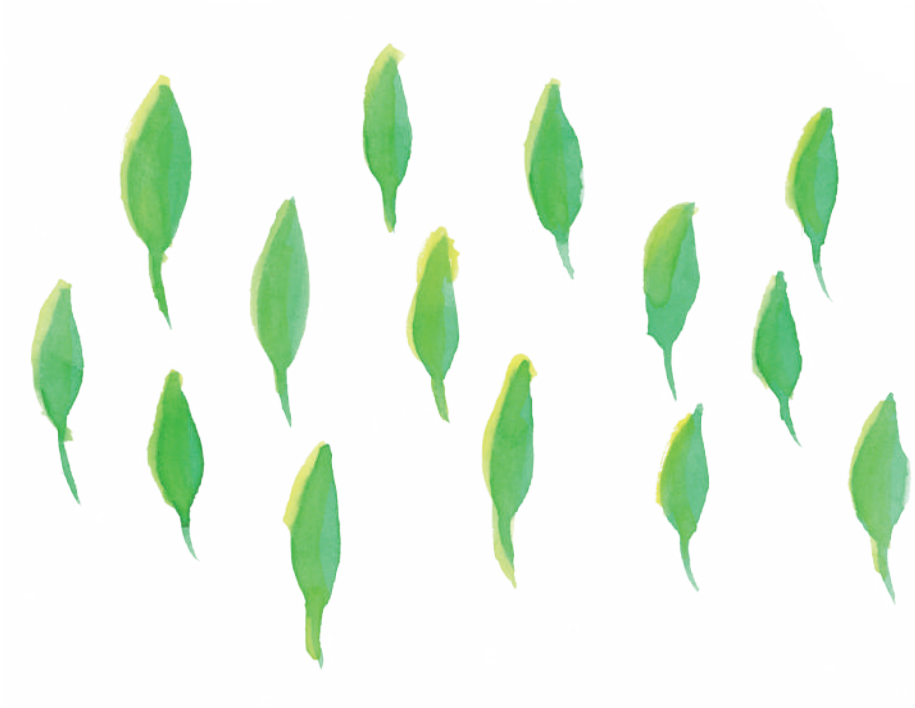
令和三年六月二十三日
作詞　大中臣正比呂

（一）
雪室（ゆきむろ）に　外陽（そとひ）あふれて　水の面（おも）
籾（もみ）の備えも　恙（つつがな）無く
あなたの顔を　映し出す
あの日を思う　ああ、緑り川

（二）
山（やま）青き　野（の）辺の匂いに　誘われて
浮き草に住む　虫たちと
あなたは帰る　夏休み
姿探（さが）した　ああ、緑り川

（三）
天高く　稲穂（いなほ）刈る　魚沼（うおぬま）に
利鎌（とがま）　磨（みが）いて　末（すえ）を切り
あなたと背負う　黄金束（こがねたば）
夕食（ゆうげ）の煙（けむ）り　ああ、緑り川

（四）
寒空に　酒米（さかまい）解いて　鎮（まも）ります
室（むろ）に納（おさ）めた麹床（こおじどこ）
あなたに手向（たむ）く、　盃（さかずき）を
待ち侘（わ）び願う　ああ、緑り川



【解説】

緑（みどり）色に澄んだ上等の酒を、中国では「緑酒（りょくしゅ）」という。中華街に行くと街並みに紅色の提灯（ちょうちん）が下がっていて、賑（にぎ）やかな感じがするものである。この街で酒を楽しみ、食事を楽しむ。「紅灯緑酒（こうとうりょくしゅ）」の所以（ゆえん）である。

新潟の魚沼地方は雪深い。春は未（なご）だ残り雪が多く、雪解（ゆきど）けの水が溢（あふ）れて魚野川（うおのがわ）に注ぐ。豪雪（ごうせつ）とともに、「こしひかり」で名高い米どころである。いや、諸兄も納得の、銘酒（めいしゅ）の里でもあるから、柳都（りゅうと）の芸者さんの案内で、新潟駅の「ぽん酒館」に行き給え。五百種ほどの新潟のお酒がワンコインで飲めるよ。いやいや、五回までの「試飲の盃」ですって。
無料の塩と味噌の備えで、きっと追加コインとなるさ。帰りは古町（ふるまち）でご飯食べかなあ。

越後（えちご）の夏は緑の田園である。晩春の魚沼（うおぬま）の川は鮎（あゆ）が捕れるせいで「魚野川（うおのがわ）」と云うのであろう。この緑の自然を想起させるネーミングが気に入って、今夜は、清酒「緑川（みどりかわ）」にしよう。

お米の栽培は、春の苗床（なえどこ）、夏の草取り、秋の収穫、そして酒造りだ。まるで、お酒は転生輪廻だ。それに人々の生き様が乗ってゆく。
演歌、「緑の川」の由来（ゆらい）でもある。

古来（こらい）より、天皇は祭祀（さいし）の長として、農事中心の　政（まつりごと）　をなされた。
そして、毎年の神事（しんじ）は酒と共に在る。
更なる昔、稲作は日本から朝鮮半島を経て大陸諸国に広がったのである。